

第十一回与謝野町蕪村顕彰全国俳句大会
前書俳句の部 入賞作品

与謝野町俳句大賞

戦後七十七年遺児の夫は

受け継ぎし背丈六尺墓洗ふ

京都府八幡市

大山文字

京都府知事賞

母、コロナに克つ

ふたたびの公民館のさくらかな

京都府舞鶴市

谷田明日香

与謝野町長賞

保津川下り

峡抜けて時雨明りの嵐山

京都府亀岡市

井上 實

宮津ロータリークラブ会長賞

武力による領土拡大が現実には起きるとは

ひまわりの丘に新たな国境線

大阪府大阪市

神田昭次

田中春生賞

帰省して

同じ峰見てゐる父子夕端居

京都府舞鶴市

上林ふらと

山尾玉藻賞

久しぶりの雨でした

伸びて伸びて殻忘るなよかたつむり

京都府舞鶴市

新庄富美

選評一覽

選者 田中春生 山尾玉藻

与謝野町俳句大賞

戦後七十七年遺児の夫は
受け継ぎし背丈六尺墓洗ふ

京都府八幡市 大山文子

【田中】六尺と言えば約一八〇センチメートルの長身。亡くな

った父君もまた作者と同じく長身であったのだろう。
そんな父君への敬慕の思いをしみじみと込めて、お墓
にお参りしている高齢の男性の姿が目には浮かぶよう
だ。

【山尾】作者のご主人は先の太平洋戦争で父上を亡くされ、父
上の顔も知らずに育たれたのでしょうか。しかし常に母
上から「お父さんは背丈が六尺もある大柄で立派な人
だった」と聞かされていたようで、ご主人も作者にそ
れをよく話されるのでしょうか。今や古びた「尺」の語
が、ご夫婦の中で変わらず生き続けてきた事実にしみ
じみと心動かされました。

京都府知事賞

母、コロナに克つ

ふたたびの公民館のさくらかな

京都府舞鶴市 谷田明日香

【田中】しみじみと眺めているのが、吉野山や京都の名園の桜
ではなく、「公民館のさくら」という慣れ親しんだ日
常身近の桜であるところが素晴らしい。病の体験は、
ふだんの暮らしの大切さをしみじみと感じさせる。

【山尾】「母、コロナに克つ」の前書から、母上がコロナ感染
から復帰された様子が解ります。そして春、母子で桜
見物するのに有名な桜の名所へ出向くのではなく、
毎年仰いできた近所の公民館の桜を見に行かれたこ
とに好感を覚えました。「ふたたび」に素直な喜びが
籠められています。

与謝野町長賞

保津川下り

峡抜けて時雨明りの嵐山

京都府亀岡市 井上 實

【田中】山々の迫った峡谷から広やかな川面に出たときの、開
放されたような気分が伝わる作品。「保津川下り」の
前書が加わることで鮮明に場所と移動の方法が分か
り、水上からの視点で嵐山の風光を想像できるのであ
る。

【山尾】前書「保津川下り」が簡潔で明快なのが好ましいです。
保津川を下り終えると嵐山はたまたま時雨れていた

のです。あの辺りは川幅がゆったりと広くなり、作者
に「時雨明り」なる細やかな気分を呼んだのです。と
同時に、読み手に今まで下って来た溪谷の薄暗さをも
イメージさせ、広がりのある一句となっています。

宮津ロータリークラブ会長賞

武力による領土拡大が現実には起きるとは

ひまわりの丘に新たな国境線

大阪府大阪市 神田昭次

【田中】第二次世界大戦を背景にした映画『ひまわり』での、
一面の向日葵畑のシーンを彷彿とさせる作品。美しい
向日葵の丘に、国家の武力によって新しく設けられる
国境。戦争の悲惨さを体験したはずの人類の愚行を思
わせる。

【山尾】ロシア軍のウクライナ侵攻を期に両国間に戦争が勃発
し、今回はこの悲しい現実を前書にした多くの作品が
集まりました。このような非常事態にこそ前書俳句が
本領を発揮すると思われれます。中で、掲句は戦争の悲
惨さを健やかで朗々としたイメージの「ひまわり」に
語らせている点が非常に印象的で心動かされました。
但し、ニュースメディアを通しての感慨であり、イタ
リア映画『ひまわり』のストーリーと重なる点が気が
かりでした。

田中春生賞

帰省して

同じ峰見てゐる父子夕端居

京都府舞鶴市 上林ふらと

【田中】端居する父と子。それぞれの年齢は定かではないが、
前書から、帰省の子と父とのひとときの交流を想像す
る。二人が共に眺めているのは故郷のさほど高くない
山。かつては共に登山を楽しんだ場所なのかも知れな
い。

山尾玉藻賞

久しぶりの雨でした

伸びて伸びて殻忘るなよかたつむり

京都府舞鶴市 新庄富美

【山尾】このところ早り続きだったようですが、今日漸くたつ
ぷりと雨が降ったのでしょうか。この二、三日庭の植木
の葉に見かけなかった蝸牛も、ゆっくりと身を伸ばし
て雨を楽しんでいるようです。「殻忘るなよ」の呼び
かけに慈しみに溢れています。

前書俳句の部 入選一覽

田中春生選

賞候補

指物師たりし

父の遺せしぶらんこと木馬かな 大阪府大阪市 今井文雄

母子家庭のK君、奮闘する

母看取りつつの中学卒業す 茨城県石岡市 小池つと夢

京都梅小路公園にて

花棟けむりふくらむ汽車の来る 京都府長岡京市 南部小花

教室にて

担任の告げる懐妊青葉風 兵庫県神戸市 平尾美智男

瀬戸内寂聴さんの笑顔を偲ぶ

寂庵の冬の桜となり給ふ 大阪府大阪市 古田几城

戦のあつた浜で無心に泳ぐ子ら、平和あれ

子ら泳ぐ沖の楽土へつづく海 愛知県豊明市 尾崎恵美子

手甲は着けたれど

臍当を忘れて来しか兜虫 大阪府箕面市 桑高喜秋

初荷用みかん出荷

供へ餅下げて選果機動き出す 和歌山県有田市 鳥淵都志子

胃がんの摘出手術を終えて

麻酔より覚めたる命秋灯下 大阪府枚方市 春名 勲

伝無村の母の墓守、谷口秀子様を偲びて

ともに見し熊の栗棚忘れられず 兵庫県川西市 田邊富子

佳作

コロナ禍で三年ぶりの営業再開に当たり

手作りの看板上げる海の家 兵庫県神戸市 岸下庄二

エレベレスト トレッキング

ポーターの若き遺影や登山小屋 京都府京田辺市 末田咲子

沖繩慰霊の日に寄す

黙深き散華の海や海紅豆 兵庫県神戸市 前田容宏

来春は卒園です

天高し組体操の真ん中に 大阪府大阪市 松岡節子

御用の方は押して下さい

ベル鳴らしもらふ御朱印寺のどか 兵庫県神戸市 末永拓男

コロナ禍で再会儘ならず

かりがねや今年こそはと言ひつつも 京都府城陽市 蓮井いく子

猿被害拡大す

通学路悠々然と柿喰ふ猿 神奈川県厚木市 奈良 握

小学生の頃、毎年母郷で過した夏休み

遠き日や厨の土間の日向水 愛知県岡崎市 松崎成子

介添しゆつくり歩を運ぶ

片陰を選んで歩く杖の音 奈良県奈良市 三本嘉夫

東日本大震災から十一年

海を懼れ海に安らぐ春の波 大分県佐伯市 吉武厚男

硫黄島にて

全天の星なだれ落つ天の川 長野県富士見町 小林遊魚

子のをらぬ身なれば

母の日の縁なき花屋ちらと見る 兵庫県尼崎市 桃原晴美

稲の花粉の寿命は二三分、急がねば

稲の花真昼の風を捉へたる 兵庫県丹波篠山市 林 芳子

ボットンと一軒家の八十七歳媪のつぶやき

戦争はしちやあいかなね敗戦忌 大阪府堺市 合田マサル

京都六波羅蜜寺に参る

閻王の前にて脱ぎし夏帽子 京都府京丹後市 加藤 勝

風神雷神図屏風

金屏の二神の口や秋の声 神奈川県川崎市 樋口孝雄

義母の手捌き

古稀の指をどらせ鯛ひらくなり 京都府舞鶴市 仲まゆみ

年寄の我に

座れよと拭うてくれし露の椅子 京都府与謝野町 白数康弘

過疎化治まらず

寒村の老三人の秋祭り 京都府京丹後市 松見紀通

山尾玉藻選

賞候補

二人兄弟ふたりで母を送る

鈴蘭や兄とふたりの家族葬 愛知県岩倉市 山田雅弘

農業王国十勝中札内村

わが村は合併無用麦青む 北海道幕別町 安田豆作

育児日誌のページ目に出生時の体重が

爽やかや匆で記されわが目方 和歌山県和歌山市 津田京子

訳あって一人暮しを強いられた友の暮しぶり

新涼や一人上手となりし人 福井県小浜市 上前永子

大原美術館

モネ淡くゴッホ激しく夏の色 岡山県浅口市 工藤泰子

娘を亡くして

蝨 蝨夢にまだ子の現れず 兵庫県宝塚市 山本耀子

血液疾患の友の死を悼む

樹木葬色なき風に棲みたまふ 千葉県君津市 きたの耕太

電力不足の世となる懸念を聞いて

電線に全戸つながる炎天下 愛知県名古屋市 山内基成

何十年ぶりに立ち寄りし母校

「黙食」と貼りし食堂夏休み 大阪府大阪市 岸本美知子

祖父のアドレスは消せぬまま

ガラケーに着信を待つ孟蘭盆会 京都府京都市 佐野瑞季

佳作

疫下に生まれた末の子は夜店を知らず

綿菓子には知らぬ末の子鱗雲 京都府京都市 根来美知代

戦争のない世の中を願って一句

今もなほ鉄柵そびゆ沖繩忌 愛知県一宮市 千田滋之

トマト好きの孫の顔が

名に惹かれ苗を一株桃太郎 岩手県盛岡市 片岸ゆり子

我が家より、尾根道を行く一行が見えるので

しんがりの過ぐるを待ちて囀れる 東京都檜原村 数馬伸子

コロナ禍の寺にて

撫でられぬ撫で牛黒し夏日燦 三重県伊勢市 山本孝子

中山道妻籠宿

屋根石に茅花流しのひとしきり 愛知県稲沢市 南久美子

消灯の空一面の星月夜

キャンプの火消せば星座の軋み出す 福岡県大牟田市 鹿子生憲二

みずうみを舟で巡る

夕茜鳩の浮巢に舟を止め 大阪府東大阪市 土田善子

エレベレスト トレッキング

ポーターの若き遺影や登山小屋 京都府京田辺市 末田咲子

亡き父母の朽た生家で見上げる星は虚しい

ただいまと上がる生家や星朧 京都府京都市 林游実子

杖を持ち吟行中の事

転げたる梅の実握り転びをり 京都府京都市 山本敏子

大学漕艇部の久しぶりの練習

レガッタの舳先しぶきぬ瀬田日和 大阪府寝屋川市 三上京子

宮城県松島町の瑞巖寺にて

方寸の陽射しを拾ふ苔の花 神奈川県大和市 荒井 修

野付半島

立ち枯れの砂嘴の半島海霧の底 北海道根室市 有海悠久子

いつも悪口を言うが八十年の大切な友

杖をつき西瓜さげ来る奴が好き 千葉県香取市 坂本正夫

第十回蕪村顕彰句集を手にして

秋襲色の句集のしぼ表紙 三重県四日市市 矢田敦子

母は多すぎると笑っていた

百と三母と数へし年の豆 京都府舞鶴市 浅奥尚司

八十才の母を初めて海外旅行に連れ出して

真珠湾空より禱る母の夏 京都府京都市 吉田恭子

丹後ちりめんと自然の融合。温気に感謝

機音に朝霧うごく 与謝平野 京都府与謝野町 糸井三紀子